脱・生活習慣病

健診数値の「生かし方」

糖尿病編 8

新薬適応には条件あり

体内が高血糖状態でも、糖尿病では細胞内にブドウ糖をうまく取り込めないため、脳が糖分をほしがり、強い食欲を感じることを前回紹介した。その状態を改善するために、糖尿病にはさまざまな薬が登場している。なるべくならば、食生活の見直しだけで高血糖を改善したいところだが、うまくいかないときに、薬とどうつき合えばよいのか。

【飲み薬の最後の砦】

糖尿病には、たくさんの種類の薬がある。中でも注目を集めているのが、今春登場した「SGLT2阻害薬」。尿に糖を排出する仕組みで、血糖値のコントロールだけでなく、体重減少も期待できる。それだけに、脚光を集めて使用する医療機関も増えた。一方で、尿路・性器感染症や発疹、脱水症状などの副作用が報告されている。効果はあっても、副作用のリスクもあるわけだ。

この新薬について、日本糖尿病学会専門医の「しんクリニック」（東京都大田区）の辛浩基院長＝顔写真＝が説明する。

「SGLT2阻害薬は、飲み薬の最後の砦の位置づけです。既存の薬を服用しても、ヘモグロビンA1c（HbA1c）が9％以上（正常値6・5％未満）の人がいて、食生活の見直しも難しい。そういった患者さんには、インクレチン製剤やインスリン注射もあるわけですが、注射薬を使用する前の切り札として、SGLT2阻害薬の適切な使用が求められているところです」

辛院長が、SGLT2阻害薬を51人の患者に投与したところ、HbA1c平均9％が3カ月後には7・2％まで改善し、体重も3キログラム程度は減少。現時点で、重篤な副作用も発生していないという。

【人生初の90キログラム台へ】

もちろん、誰もがSGLT2阻害薬の恩恵を受けられるわけではない。辛院長によれば、適応と不適応（別表参照）があり、体調や年齢など個別の状態を見極めながら、使用する必要があるそうだ。

「HbA1cが7％程度の人には、SGLT2阻害薬の効果は期待できません。やせ型の人も不適応です。適応を見極めて適切に使用することで、従来の治療では成しえなかったことが可能になります」（辛院長）

SGLT2阻害薬の治療を受けた人の中には、100キログラム以上だった体重が、成人後に初めて90キログラム台になった人がいる。身体が軽くなり、食生活の見直しにも積極的になれるようになったそうだ。

「今のところ万能薬はありません。薬によって高血糖状態を改善すると、膵臓（すいぞう）の機能が回復し、インスリンを分泌する能力も高まりやすい。すると、食生活の見直しもしやすくなるのです。生活習慣病による2型糖尿病は、食生活の見直しが基本です。しかし、それだけで改善が難しい場合は、専門医に相談した上で、適切な治療を受け、食生活の見直しのきっかけをつかんでいただきたいと思います」と辛院長は話す。

（安達純子）

新薬SGLT2阻害薬処方の適応について

【適応となるケース】
①ケースにもよるが65歳未満
②内臓肥満（メタボリックシンドローム型）
③インスリン分泌能が保たれている
④栄養状態が良好または普通
⑤既存薬で効果が不十分

【不適合となるケース】
①65歳以上の高齢者
②痩せている人
③インスリン分泌能が保たれていない
④栄養状態不良
⑤明らかな腎機能の低下
⑥利尿薬を服用している人、尿路感染症、心筋梗塞、肝硬変などの人は注意が必要

＊「しんクリニック」資料より抜粋